

宮本三郎

生誕100年記念

従軍の記録 そして生の賛歌へ

7月30日^土 – 11月27日^日

芸術家としての感動とドラマの真実の記録



《生》1974年



《死の家族》1945～46年頃



《飢渴》1943年



《兵士》1942～43年頃

宮本三郎の生誕から100年目にあたる今年、わたしたちは戦後60年という節目を迎えています。戦後、日本は多くの分野で急速な復興を遂げ、経済的發展を重視する社会状況を作り上げてきました。しかしその一方、平和や豊かさを象徴する経済的發展の陰で、戦禍の記憶は薄らぎつつあります。

このたびの展覧会では、戦争を描いた画家として、また、昭和という激動の時代に活躍した画家として、宮本三郎の画業を見つめなおし、そこに通奏低音のごとくあらわれる、「生の喜び」の意味を考えたいと思います。

戦時中、宮本は陸・海軍からの委嘱を受け、従軍画家として、中国、そして南方を巡り、多くの戦争記録画を描きました。宮本の卓越した素描力は、記録画制作の場においても如何無く発揮され、銃器を構える兵士の姿や、軍用機器の詳細など、エスキースとしてのスケッチを数多く残しています。

宮本三郎にとって戦争記録画は、ドラマの真実の記録であると同時に、芸術家としての感動の表現でもありました。

《飢渴》(1943)に描かれた銀輪部隊の傷ついた兵士たち。渴いた喉に水を求め、地を這う兵士の指先には、野花が描かれています。また、《死の家族》(1945～46頃)に描かれた若き男性の亡骸。その奥には天を見上げる赤子の姿が描かれています。これらは戦地において画家が見出した一筋の光、生への希望を象徴しているとも見てとれます。そこには生と死の強烈な対比を通じた、宮本の、生の尊厳と喜びに対するメッセージがこめられているのではないのでしょうか。

晩年、宮本が好んで描いた裸婦と花。これらを宮本は、「生の喜びのすべてを託するに足るモチーフ」だと語っています。時代の移り変わりとともに描く対象は変化しながらも、そこに宮本がこめた絵画的主題、「生の喜び」は、21世紀を生きるわたしたちがしっかりと受けとめ、共有すべき世界観ではないのでしょうか。

本展では当館収蔵品より、戦時中に描かれた油彩作品と、従軍画家として戦地に赴き描いた20点余りの素描作品、そして絢爛たる色彩美に溢れる晩年の諸作品を、あわせてご紹介いたします。